

ヨハネ黙示録 21:1 わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。2 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下ってくるのを見た。

3 そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、4 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」5 すると、玉座に座っておられる方が、「見よ、わたしは万物を新しくする」と言い、また、「書き記せ。これらの言葉は信頼でき、また真実である」と言われた。6 また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。7 勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐ。わたしはその者の神になり、その者はわたしの子となる。」

1 最終目標

いきなり私ごとで恐縮ですが、十数年前に通っていた自動車教習所の教官が教えてくれた印象深い言葉があります。「車は運転手が見つめている方向に進んでいく。」というものです。教官は、「だから、自動車を運転する時は少し先の進行方向を見つめなさい、隣の車線を走る対向車が気になるからと言って、視線を対向車の方に向けると、車はそっちに行きますよ」と続けたのですが、あとあと思い返すのは最初の「車は運転手が見つめている方向に進んでいく」という部分です。この言葉を聞いてから、私はずっと思っていました。『見つめている方向に進んでいく』のは、何も車だけではなくて、人の一生においてもそうではないか？と。尊敬し憧れてずっと見続けている先輩牧師がいて、無意識の内にその先輩に似た口調の説教になる…なんていうことが牧師の間ではよくあります。また、自分を悩ます人のことばかりを考えていれば、無意識に相手との距離は縮まり、ますます憎しみに囚われてしまうということもあるでしょう。

今日の聖書箇所は、私達が見つめ続けるべきゴールが描かれています。それは人の造ったゴール、私達人間が努力して頑張ってたどりつけるゴールではありません。天地を造られた神が定められたゴール、謂わば神の最終目標地点です。6節、神ご自身が「事は成就した。」と言われているからです。神は、「全ての私の業が成し遂げられた、ここが私のゴールである」と宣言しておられます。神のゴールとはどういうものなのか、私達とどのような関係があるのか、ご一緒に見ていきたいと思います。

2 ヨハネの黙示録

「ヨハネの黙示録」が書かれたのは、紀元後80年から90年代終わり頃。ローマ皇帝ドミティアヌスのもとで、生まれたばかりのキリストの教会は激しく弾圧されていました。特に小アジア、今のトルコでは、沢山の信徒が処刑されたそうです。そんな中、人々から尊敬されていた長老ヨハネもローマ帝国により捕らえられ、エーゲ海に浮かぶ小さな島「パトモス島」に幽閉されます。

「ヨハネの黙示録」の「黙示」には、「隠されていたものを露わにする、おおいを取りさる」という意味があります。「ローマ帝国」という絶大な権力からの激しい暴力的迫害に呻き苦しむ長老ヨハネに、神は、人間には隠されてきた、この世界の終わりの有様を幻として見せました。それを書き記したのが「ヨハネの黙示録」だと言われています。今日の箇所は、「ヨハネの黙示録」のクライマックスです。

3 最初の天、最初の地、海のある世界

それは世界が崩れ去る幻から始まりました。この世界が過ぎ去る、崩れ去る、壮大なスケールでありました。長老ヨハネは呆然として息を呑んで見守るしかありません。崩れ去り、過ぎ去ったのは、最初の天、最初の地です。聖書の最初創世記の1章で神が永遠の昔に造られた天地です。「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ』こうして光があった。」またこうも記されています。「神は言われた。『天の下の水はひとつ所に集まれ、乾いた所が現れよ。』そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。」神の口から出る言葉によって造られた私達が住み、生きているこの世界です。その最初の世界には「海」があります。太平洋や大西洋などの物理的な「海」ではありません。混沌の世界、闇の世界をさします。神の支配、神の秩序を受け入れない世界、それがここの「海」です。

私達の住む世界は、人の罪によって破れほころびていると言ってよいと思います。この世界に、どれほどの争いがあるでしょうか。嘆きが、悲しみが、生きるための労苦があるでしょうか。「死」が力をふるい、私達人間を支配しています。私達はやがてやってくる「死」に怯え、「この時さえよければいい」「自分たちさえよければいい」「富や名誉さえ得られればいい」という驚くほどに自己中心的に儚い命を生きています。まるで、この世界の腹の中、私達の腹の中は、混沌とし、何がいるかわからない深くて暗い「海」のよう。人を食い尽くす魔物が住む海が厳然と存在する世界。その影響は人間社会だけではありません。自然もまた呻き苦しみ悲鳴をあげます。人間が傲慢にも自分たちの便

利さを追い求め破壊した結果です。最初の世界、私達が住む天地は、不完全な世界で不安定な世界、「海」のある世界です。

4 不誠実な教会

残念ながら教会も例外ではありません。確かに私達キリスト者達は、キリスト・イエスの十字架と復活により罪の縄目から解放された者達です。しかし、私達が完全に主イエスの事だけを考え、主イエスの後を完全に從っていく事ができているか？という、甚だ心もとないものです。教会は幾度となく分裂しましたし、この世の権力者と結託して弱い者たちを圧迫するという罪さえ犯したことを省みるとよく判ると思います。

神と不誠実な信仰共同体との関係を、夫婦の關係に喩えたホセア書という預言書があります。そこで語られているのは、不実で浮気性の妻をもった夫の苦しみです。自分以外の男性と浮気を繰り返す妻とその妻に対する愛にもがき苦しむ夫の姿を通して、神を裏切り続ける人間と、それでも人間を愛し招き続ける神の姿を描き出しています。ホセア書のように夫婦の關係に置き換えれば、教会が、主イエスに対してどれほど不誠実なパートナーであるかがよく分かります。私達を深く愛してくださる主イエスと父なる神よりも、この世のものを第一に求めてしまう花嫁です。夫から非難され、離婚されても仕方がない花嫁、それが私達の教会の偽らざる姿。神はどれほど私達に失望し、その愛に呻き苦しんでおられ、忍耐しておられることでしょうか。しかし、神は私どもへの愛を決して諦めようとはなさりません。

5 主イエスの花嫁

遂に、神は、最初の不完全な世界を過ぎ去らせ、「完全な世界」を到来させます。それが、「新しい天、新しい地」ー新しい世界、完成された世界、「海」のない世界です。私達を神から引き離す悪魔がいなくなった世界と言えるでしょう。1節「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。」とあるとおりです。神は、私達人間をお救いくださる業の舞台として、せつかくお造りになった最初の世界をまるごと廃棄し、再び新しい天地、新しい世界を造ってくださいます。私達一人一人の救いは、世界よりも価値があると神はお考えになっている…神の愛は私達には推し量ることはできません。

そして新しい世界でひとときわ光輝くのは、キリスト・イエスを信じる人々でした。2節には「更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下ってくるのを見た。」とあります。ここでの「エルサレム」は、神を信じる信仰者の共同体をさし

ています。現代で言えば、教会です。新しいエルサレムとは、新しく完成され教会のことです。

花婿花嫁は、お互いに深く愛し合い、お互いを必要とし、なくてはならない者として尊重しあう間柄です。相手を自分自身よりも自分の喜びとする関係とも言えるでしょう。去年の三月、神学生時代に横浜教会で熱心に奉仕してくださったN牧師の結婚式がA教会でありました。花嫁を迎えるN先生の喜びが強く印象に残る式でした。結婚のまことの喜びは相手が絶世の美男美女だからとか、大金持ちだからとか、自分の欲望を叶えてくれているからとか、そんな条件付きの喜びではありません。「あなたがいるだけで私は嬉しい、あなたは私の最大の喜びだ」それが花婿花嫁の喜びでしょう。

最初の世界では不誠実の限りを尽くし主イエスを悲しませた教会が、新しい世界では変えられます。主が「あなたがたは私にとって最大の喜びだ！」と心から喜んでくださる教会となるのです。そして、教会の私達もまた主を心から喜び第一に考えるように変えられます。そうして、主と教会は一体となります。それが神が定められたゴールです。終わりの時に起こることは、「**教会はキリストの体である**」という言葉が完成する時です。

2節の「**夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて**」の「整えて」は受身形で、「**夫のために着飾った花嫁のように用意を整えられて**」が直訳です。誰が整えてくださるのでしょうか。神です。教会自らが必死になって花嫁の準備をするのではない。御神自ら、私達を、主イエスの花嫁として整えてくださいます。古代中近東の風習では、花嫁の父の家に花婿が出向き、手をとって新居に連れてきて、盛大に婚礼の宴を開いたそうです。そのことを踏まえて読むと、主イエスが神のみ元で神によって整えられた美しい花嫁なる教会を訪ねて手を取り、共に新しくされた世界にやってきて住む…そんな様子が浮かんできます。

6 神が成し遂げて下さる救い

それは教会だけに限りません。3節、4節では、神ご自身が私達人間の間に住んで下さる事が記されています。神とは、この世界を造られた方、この宇宙全体よりも大きなお方です。「**神は果たして地上にお住まいになるでしょうか。天も、天の天もあなたをお納めすることができません。**」(列王記上 8:27)とあるとおりです。ですが、終わりの時には、神ご自身が新しい世界に突入してこられます。今まで人の目で見える事も手で触れる事もできなかった天のみ神が完全に近くまで来られます。その御手で、私達の頬にふれ、目の涙をぬぐい去ってくださるほどの近さです。御神の御手の感触を私達は頬に感じる事ができる近さ。命の造り主がそのような近さに共にいてくださるから、私達はもう神を見失うことはありません。それが、「海」がなくなった新しい天地、神の最終目標、私達が見つめ続けるべき神のゴールです。くどいようですが、この

目標は私達人間が自分たちの力で到達できるようなものではありません。ただ、「無」からこの宇宙全体をお造りになることができる方だけが、私達に無償でお与えくださる救いの完成です。「見よ、わたしは万物を新しくする」と仰っているとおりです。

7 勝利を得る者

しかし、今、現在、最初の世界、不完全な世界に生きる私達と、やがてくる終わりの時、神が新しくする世界は全く無関係ではありません。現在は、やがてやってくる新しい世界に深い関係があるのです。6節には「わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から値なしに飲ませよう」とあります。この最初の世界で導いてくださる神と新しい世界を造られる方は同じ方、私達が慕う主イエスの父なるお方です。

6節の「渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。」ヨハネ福音書で、生きる喜びを見失った孤独なサマリア人の女性に話しかけた主イエスが思い出されます。このサマリア人の女性のように、「海」がある不完全な世界では、私達一人一人「あなたの存在が喜ばしい」という神の愛に飢え乾いています。だから、この世のもので心を満たそうとする。うまくいかずにますます飢え渇く―それが、この世界に生きる私達の現実です。そんな私達を憐れに想い、神の独り子イエス・キリストは、父なる方の懷を出て私達の弱さの中にわけ行ってくださり、私達一人一人と出逢ってくださいました。強さの中に豊かさの中に来てくださったのではありません。不完全な世界で生きる私達の弱さ、貧しさの中に来て下さり、私達にご自身の豊かさ、強さを惜しげもなく与えてくださいました。最期は私達の神に対する罪を贖うために十字架にかけられ「成し遂げられた」と仰って息絶えました。しかし、三日後には、父なる神のみ力により、新しい命に甦られました。甦りの主イエスの命は、新しい世界の命、永遠の命です。このキリスト・イエスこそ、7節「勝利を得る者」であり、新しい天地を受け継ぐお方です。

8 イエスは世に勝っている

さて、先週の礼拝の後、N 兄と T 兄がそれぞれの信仰について語ってくださいました。語られた内容は異なっていましたが、ひとつの点で一致していました。N 兄は洗礼を決心した時の聖書の言葉としてヨハネ福音書の「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ16:33)を挙げました。一方 T 兄は、「真剣に祈っていると、どんなに八方塞がりの状況でも、主イエスが既に勝利を収めておられることが判る」と語り、祈りの内に主イエスの勝利を確信した経験を証されました。お二人とも、人生の困難が襲う中、「主イエスこそが勝利者である」という確信が与え

られ、信仰生活を続けてこられました。それは多くの信仰者に言えることでしょう。

多くの信仰者達を支え続けた主イエスの勝利は、この過ぎ去る世界の中での勝利ではなく、新しい世界での勝利であることが、今日のテキストで明らかになります。キリストの勝利とは、必ずやってくる新しい天地、「海」のない世界、神が共にいる世界だからです。

9 闘い、苦しみ

しかし、まだそのゴールは来ていません。だから過ぎ行く世界で新しい命のキリスト・イエスに従いゆく私どもには、闘いがあります。私達の外からやってくる苦しみがあります。病気、リストラなど経済的問題、人生における色々な挫折、家族の問題など思いもかけぬ出来事が私達を襲います。私達の内側では古い自分との激しい闘いがあります。苦しみ葛藤します。苦しみや葛藤じたいは、悪いものではないでしょう。その事を通じ神を知り、人間を知ることができれば、寧ろ私達にとって、苦しみは良いこととなるから。ですが、その苦しみがあまりにも大きく激しいと、私達は呑み込まれてしまいます。目の前の苦しみ全てとなり、神を見失う。そうして度々、罪を犯します。

「ヨハネによる黙示録」が書かれた時代の教会もそうでした。大きな迫害がもたらした激しい痛み。次々と捕らえられ、残酷な方法で処刑されていく指導者や仲間達。いつ続くとも知れぬ迫害の日々の痛みや苦しみに呑み込まれてしまいそうな教会の長老ヨハネに、神は終わりの日の幻を見せました。ご自身のゴールを見せました。そして、「この輝きの朝は必ずやってくる。この世にあって激しい闘いの中にあっても、救いが成し遂げられる輝かしい光を仰ぎ見て進むことができる。終わりの日の喜びに、今、生きなさい」と、長老ヨハネを通じて苦難の教会を招いたのです。神は、今を生きる私たちにも全く同じことを伝えようとされています。だからこそ、「書き記せ」(5節)と長老ヨハネに命じられました。

10 新しい命に生きる

私達は、今、ここで、最初の不完全でやがて去りゆく世界の中で、いつかは滅び塵にかえる肉体をもち、主イエスと出逢い、主の十字架の贖いによって罪赦された者、キリスト・イエスの聖霊が与えられた者として生きています。私達に与えられたキリスト・イエスの霊は、甦りの主の霊です。新しい天地からやってきた霊です。私達は、新しい天地の命を、最初の世界、過ぎ去る世界に生きる不完全な肉体に収めています。アンバランスです。私達自身は尚も弱く不完全なのに、キリストから引き離そうとするこの世の力

は強大だからです。しかし、どんなに私達の悩みが深く大きく、この世界を覆うように思えても、私達の神は、その悩みよりもはるかに大きい方であり、また誠実な方、必ず約束を守ってくださる方なのです。その事を私達は、どこで知るのでしょうか。

この古い世界で知るのです。苦しんでいる今こそ知るのです。大きな苦しみの中で主に助けを求めて叫びを上げるとき、神は必ず逃れの道を示してください。また、この世の力に負けてしまい罪を犯したとき、神は主イエスの十字架のもとに私達を招き、悔い改めるように迫ります。心を開いて主の十字架を受け入れたとき、私達は変えられます。そうして、自分がどんなに弱く乏しく小さくとも、キリストの勝利に希望を置くことができるよう、この世界での信仰を確かにされて変えられます。今、ここで将来の新しい命に生かされる者とされ続けます。

まるで新しい世界の全く新しい命の種が、過ぎ行く古い肉の体に蒔かれている状態と言えます。まさに芽をだそうとしている新しい命の種。立派な花へと成長させてくださるのは、神です。私達は種に水や肥料をやって、開花の時に備えます。また、今の私達は、美しい蝶蝶に生まれ変わる前の芋虫とも言えます。芋虫は葉っぱを食べて、蝶蝶に生まれ変わる羽化に備えます。私達も神によって完全に新しい命へと変えられる、神の花嫁として備えられるのを待ちつつ、神を知り主イエスを知り信仰を確かにされるために、今、この世界を生きています。それが、今の私達の苦しみの意味です。イエス・キリストが、私達によって勝ちを得るための苦しみ、主と共にあるための苦しみです。だから、終わりの日、神が成し遂げて下さる救いのゴール、はるかなる目標地点を仰ぎ見て、この過ぎ行く世界で、今、横浜ナザレン教会に集う方々と共に、主イエスの後を従う一步を踏み出したいと切に願っています。